

本がくれた

彩
い



kuresaki

本がくれた彩り

江國香織の『温かなお皿』という本がある。いや、手元にはない。正確には、私の母校である高校の図書室にその本はあった。食べ物にまつわる短編小説集だ。

中学を卒業し、県外の私立高校の寮で三年間を過ごした。人と違うことがしたくて県外受験、公立の高校には落ちて、高校の入学式（寮の入寮日でもあった）は、どちらかといえば期待よりも不安のほうが大きかったように記憶している。入学式が終わり、特進科の入学生は一つの教室に集められ、学科の先生がたからのありがたいお話を聞いた。

曰く「あなたたちの高校時代は灰色です」。

余談だが、この言葉を言った先生は高校三年のときの担任だ。古典を担当する厳しい先生で、ややヒステリックでもあり、喋り方にもクセがあったのでこの先生のモノマネは今でもできる。高校時代の旧友の前でやってみたらウケると思うけれど、彼女たちと再会したいとはあまり思わない。

話が逸れた。まあそんなわけで、灰色と決め付けられてしまった高校生活を始めたばかりの私は暗鬱としていた。授業にはついていけていたけれど、女子校という刺激のなさはつまらなかったし、寮生活というのは思っていた以上にしんどかった。規則は厳しく、ご飯は美味しくなかった、というか正直口に合わなかった。テレビは基本的に観ることができなかった。一番しんどかったのは、午後九時から零時までの「学習時間」というやつだ。他の人が勉強しているそばで居眠りばかりしていて、我ながらどうしようかと思っていた。

そんな折、何がきっかけだったかは覚えていないのだけれど、ふらりと図書室に行った。

小学生の頃に昼休みは図書室に入り浸っていた私だけれど、中学校の図書室は狭く暗くいつも鍵がかかっていたので読書からは遠ざかっていた。高校の図書室は充実していたほうだと思う。もちろん参考書や古典や辞典類は多く並んでいたけれど、入ってすぐの場所に展開されていたのは書店の陳列のようなイマドキの本たちだった。そんな中にピンク色の装丁の『温かなお皿』はあった。

明るく可愛らしい表紙に惹かれ、手に取った。開き、ぱらぱらとページをめくった。今でこそ江國香織は好きな作家だけれど、当時の私は名前さえもよく知らなかった。かなが多く文体は柔らかく感じられた。そのまま図書室のカウンターで貸し出しカードに記入した。

帰寮し、学習時間になって、私は学習机に形だけノートと辞書を広げた。鞆から『温かなお皿』を取り出した。右手にシャープペンシルを持ち、本を開いた。気付けば一時間ほどが経過していた。集中して一気に読んでしまっていた。興奮していたとっていいだろう。眠気は吹き飛んでいたその日の学習時間は終了まで課題やら予習やらをやることができた。

本に出てきた食べ物は、どれも美味しそうだった。何てことのない普通の食べ物がほとんどだったけれど、そのどれもが幸福な食事のひとつと結びついているように感じられて、うらやましかった。私はもともと食事に対する執着があったらしいことを気付かされた。さくらんぼのパイを売っているのを見かけるとつい買うようになっていた。汁物の手毬麩は箸でつまんで眺めてから口に入れるようになった。じゃがいもは茹でてバターを落としたものが一番だと思うようになった。カップラーメンは背徳感とともに味わうようになった。寒い日に食べるアイスクリームは何か特別なものに思えるようになった。そして、本の中で息をしている人たちは、みんな生き生きと輝いて見えた。そんな風に私もなりたい、そう思った。憧れた。

私は毎週、図書室で本を借りるようになった。夜の学習時間は眠くてたまらないので、課題を終わらせた後は本を読んで過ごすことが多かった。最初は江國香織の本を中心に読んだ。村上春樹を初めて読んだのも高校生ときだ。芥川龍之介も読み込んだ。ワーズワースやコクトーなんかも好んで読んだ。私の高校時代は図書室とともにあったと言っていい。そのきっかけを与えてくれたのが『温かなお皿』だった。

それからもうかなりの時間が経った。

高校を卒業した私は大学に入り、いろいろあって中退し、就職、結婚を経験して今に至る。『温かなお皿』は文庫『つめたいよるに』に収録され、本屋で出会った私は迷いなく購入した。好きな本は何度も繰り返し読むほうだ。文庫は、持ち運ばれたり布団にもみくちゃにされたりするうちにぼろぼろになり、私は自分用に二回、買いなおした。それ以外でも、プレゼント用に何度か買った。

私はいわゆる「読書家」ではない。仲良くさせていただいている周囲の人と比べると本は読まないほうだと思う。それでも、本を読む時間は好きだ。物語の世界で物語の人物に自分を投影して違う人生を擬似体験する。そんな読書の楽しみを私に教えてくれたのは間違いなく『温かなお皿』、この本である。

(kuresaki)